

博士学位論文題目： William Faulkner と Toni Morrison における所有、人種、ジェンダー
—Go Down, Moses と Beloved、The Sound and the Fury と Paradise 考察—

提出者氏名： 銅堂 恵美子

論文概要：

1980年代以降の批判的人種理論やホワイトネス研究の台頭により、人種は生得的事実や科学的事実としてではなく「社会的構築物」として認識されるようになったが、Cheryl I. Harris は、ホワイトネス研究へ多大な影響を与えた論文、“Whiteness as Property”(1993)において、アメリカにおける人種概念の構築は所有の問題とともに精察されなければならないとして、白人性が所有という特権を持つ者として意味付けられ、実践されてきた歴史を明らかにした。本研究は、人種問題を重要テーマとして描き、比較研究の対象とされる事も多い William Faulkner (1897-1962) と Toni Morrison (1931-) の諸作品を通し、アメリカにおける所有と人種の複雑な関係性を精査し、さらにその関係性がセクシュアリティの抑圧と支配により強化される仕組みを明らかにする。Go Down, Moses (1942)、Beloved (1987)、The Sound and the Fury (1929) と Paradise (1997) という4作品において、Faulkner と Morrison は、所有、人種、ジェンダーという概念の連鎖がもたらす個人的、社会的帰結を鋭敏に描出しているだけでなく、それらの構図に抵抗し、挑戦する形で人種概念の構築性を看破している。

第1章では、McCaslin 農園の「呪い」からの解放を求める“The Bear”の Isaac の真の願望を読み直し、それが所有概念が持ち込まれる以前の世界への回帰という幻想である事を立証する。「解釈 (“translate”）」という問題の重要性に注目し、ネイティブ・インディアンの土地収奪の歴史が、旧約聖書や John Locke の所有論と結びつきながら、いかに正当化されたのかを明らかにする。Isaac は、所有権という白人の特権を放棄する事で南部の「呪い」を解こうとするが、彼の行為によってその「呪い」が解消される事はない。ここでは、Isaac は白人でありながらも特権を放棄し、所有という行為に抵抗を示したという読みを実践する。

第2章では、Go Down, Moses 中の“Was”と“Delta Autumn”に着目し、混血が進むにつれて揺れ動く所有者と所有物の関係性を、「儀式化された狩り」という観点から検証する。本章では、Faulkner の描く狩りの儀式が、白人支配の構図を繰り返し再現すると同時に、反転や揺らぎを伴う事を証する。McCaslin 家の白人と黒人の家系図は複雑な血の混じりによって絡み合うが、狩りの儀式は人種の支配関係を明示し、白人血族と黒人血族の間に境界線を引く働きを持つ。しかし Faulkner は、狩りの構図に描かれる狩る者(白人)と狩られる物(黒人)の関係を時に反転させながら、完全に分離する事のできない McCaslin 家の白人と黒人の関係性を提示している。ここで

は、土地の新たな継承者となる Roth の愛人である女、すなわち、創始者である Old Carothers McCaslin の血を引く Tomey's Turl の子孫が「狩る者」として登場する時に、狩りの構図が最も揺らぎを伴う事を明らかにする。

第3章では、第1章と第2章で検証した所有と人種の深い結びつきを、法という観点から検証する。書く行為が白人の特権として機能し、それにより白人が「定義する者 (“the definers”）」として黒人の非人間化を正当化する事ができる仕組みを明らかにすると同時に、奴隷を所有物と規定する定義を打破する Sixo や Sethe の抵抗について考察する。Sethe の子殺しについては、奴隷の親権を否定する奴隷制度への抵抗であると同時に、奴隷所有者が奴隷の生命を支配し、所有した行為と同様の「所有行為」であると論じ、彼女の強い母性愛を理由に子殺しを正当化しようとする従来の読みを再解釈し、Sethe の子殺しの両義性を明示する。

第4章では、第1章から第3章で精査した *Go Down, Moses* と *Beloved* の比較考察を行う。ここでは、人種と相互依存的に機能する所有の問題が、アメリカにおいて自由の概念と結びつく点に着目し、Isaac と Sethe の求めた「自由」とは何かという問題を考察する。Locke によれば、「自由」とは他者の意志を排除し、法の範囲内で自分の所有物を自分の意志に従って処分及び管理する権利であるが、Isaac はこの Locke の規定する「自由」が白人男性に限定的に与えられた「自由」であるとして土地所有権を放棄し、子孫を残す事さえ拒絶しながら、McCaslin 共同体から孤立する。一方、Sethe は奴隷制度という暴力的法の下では黒人の「自由」は白人によって制限されているとして法の外側の「自由」を模索している。

結婚制度は財産が「純血」の白人男系子孫に限定的に継承される仕組みを維持する役割を果たしたが、白人子孫を産む役割を与えられた中産階級の白人女性は「淑女」となる事を期待され、彼女たちの性は抑圧され、管理された。第5章では、*The Sound and the Fury* における Caddy や彼女の娘 Quentin の性に対する抑圧が、「純血の白い血筋」を永続化させる存在として作り出された「南部淑女」の神話の強要であることを明らかにする。本章では、「娼婦」と呼ばれた Caddy や Miss Quentin は、「南部淑女」として正当な白人男性と結婚し、男系子孫を産む事を拒絶したのであると論じる。さらに、母から与えられた財産を Jason から奪い返す Miss Quentin の行為を、財産の継承が父から息子に限定される所有の仕組みを覆す行為と読む事で、所有と人種の関係性を強化する存在としてセクシュアリティを抑圧された白人女性の抵抗を読み解く。

第6章では、*Paradise* で描かれる黒人の共同体社会が、財産所有を特定の人種の特権とする構図を模倣した事で、アメリカの白人社会が行なった排除と暴力を繰り返している事を論証する。*Paradise* は、所有という特権がいかに人種概念と結びつき、機能したのかを明らかにしていると同時に、所有によって特定の人種カテゴリーが特権化されるためには、セクシュアリティの抑圧が不可欠となる仕組みを露呈している。Morrison は、「楽園」を築くべくネイティブ・インディアンの土地を犠牲にして建設された Ruby の町及びアメリカという国のあり方を問い直し、共有や交換の概念を提示しながら、楽園が永続的に所有される場所ではなく、常に作り変えられる場所

であると再定義しているのである。

第7章では、Compson 家や Ruby の町から移動する女たちに焦点を置き、拘束や移動という *The Sound and the Fury* と *Paradise* に共通するテーマを考察する。父系血統を中心とする家族集団において、全財産の所有権の保護は女性のセクシュアリティと移動を家庭内に制限する事で管理されたと指摘されるように、Caddy や Miss Quentin の行動は監視と尾行、拘束によって管理され、Ruby の町に至っては“shrine”となったオーヴンが象徴するように、町全体が家として機能し、女性の行動を制限している。本章では、こうした場所から Caddy や Miss Quentin、Ruby の町の女たちや修道院の女たちが脱走や移動を繰り返している点に着目し、彼女たちの移動を支配構図に対する抵抗として読む。

このような論考の結果、本論は Faulkner と Morrison が、*Go Down, Moses* や *Beloved*、*The Sound and the Fury* と *Paradise* において、所有、人種、ジェンダーという概念の連結により構築された家父長的人種差別社会の仕組みを剔抉し、支配や抑圧に対する抵抗を描きながら、人種の構築性を看破していると結論づけた。Faulkner と Morrison のテキストにおいて、所有に基づく人種的支配の構図は堅牢であると同時に不安定性を孕むものとして提示され、登場人物たちによって抵抗や挑戦の対象とされているのである。